

アンケート集計の総評

沖縄国際大学 名嘉座 元一

今回のアンケートは、大学別に行った本格的な調査であり、就活を行う学生の行動やその背景にある意識が分かるような内容となっている。就活支援を行う関係者、キャリア教育関係者にとって、興味深くかつ支援に当たってとても有益なデータである。

アンケートの質問は 30 問に及び入学の目的から就活支援組織の利用の仕方、企業の選び方や内定状況など詳細に質問している。すべての集計結果にコメントするのは、紙面が限られているので、集計結果から、これから就活を行う学生、教育機関、企業・団体、また就活生を持つ家庭にとって、関心の高いであろう質問に絞って、総評という形でコメントしてみた。

1.就職活動について

(1) 働くことについていつ頃から意識し始めたのか

問 9 では、就職をして働くことについて常に意識した時期について聞いている。対象学生は短大と 4 年制大学も含むので、両者を別々にみる必要がある。まず、4 年制大学の学生の結果を見たのが図 1 である。全体では、3 年後期が最も多く、次いで 3 年前期、4 年前期の順となっている。3 年後期が多いのは就活解禁が 3 月となっているので、多くの学生は 3 年次の 12 月頃から意識し始め本格的に動き出すのは 2 月頃からのというのが実態ではないか。3 年前期から意識するのは、インターンシップが夏休み期間中にあるためであろう。

短期大学(図 2)では、2 年前期が最も多く、次いで 2 年後期の順となっている。在学期間が 2 年間しかないので、2 年の前期から動き出していると思われる。短期大学の特徴としては、人数は少ないが入学前から意識していた学生の割合(6.5%)が 4 年制大学の同割合(2.6%)に比べて高くなっていることである。

図 1 働くことについて常に意識したのはいつ頃からか(4 年制大学)

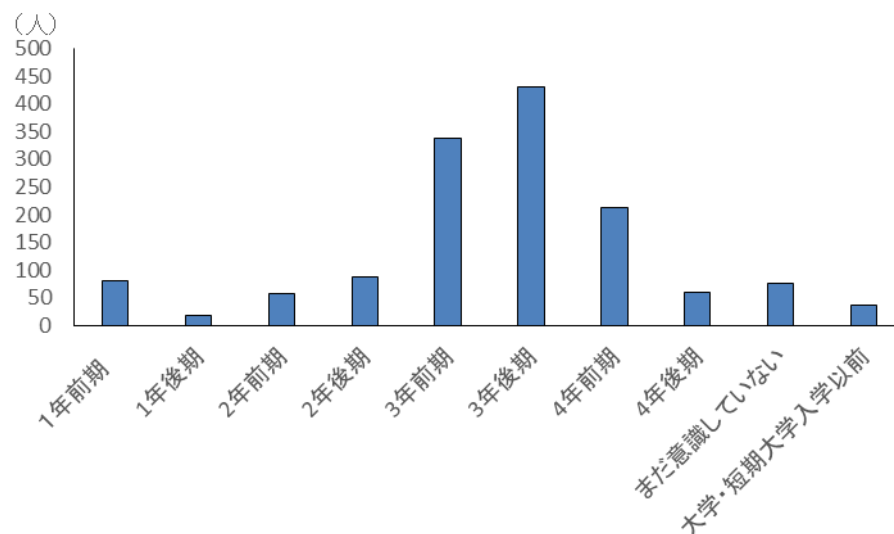
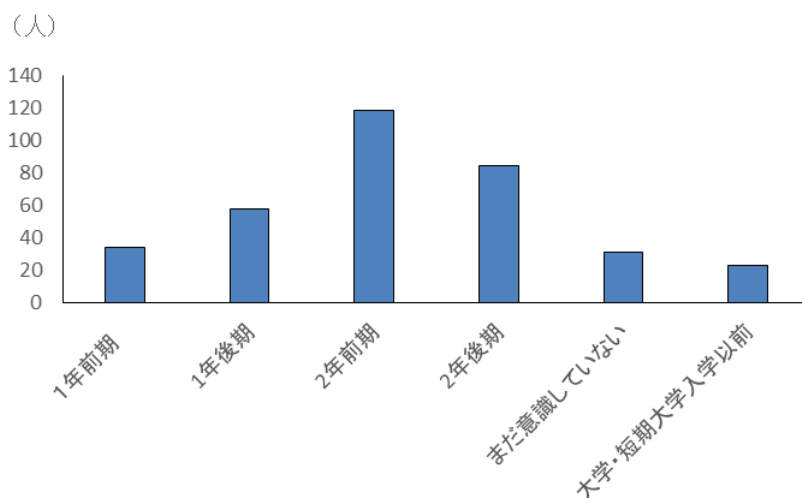


図 2 働くことについて常に意識したのはいつ頃からか (短期大学)



また、大学入学の目的と働くことについて意識した時期とクロスしたのが図 3 である。これは、質問 1 で入学の目的について聞いた質問項目別に、働くことについて意識した時期との関連性を見たものである。

ここで、以下に示した質問 1 の選択肢を大きく 3 つのグループに分けた。

問 1. 大学・短期大学入学の目的を教えてください。あてはまるものはすべてお選びください

1. 目的・夢を実現させるため、2. 専門知識を深めたいから、3. 大卒・短大卒は就職に有利だから
4. 大学・短期大学に入るのが普通だから、5. 親に言われて、6. 先生に言われて、
7. 友人が大学・短期大学に入るから、8. 特に理由はない

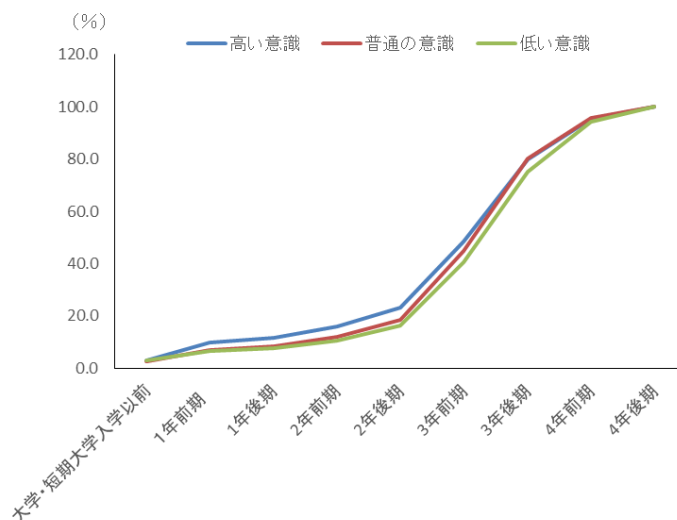
これを、以下のように 3 つのグループに分けた。

1+2=高い意識を持つ学生 (高い意識)、3+4=普通の意識を持つ学生 (普通)、

5+6+7+8=低い意識を持つ学生 (低い意識)

これは 4 年制大学で見てみた。どの時期から意識し始めたのかを累積でみたのが図 3 である。入学の目的意識が高い学生は、それ以外の学生に比べて働くことについて意識する時期が早い傾向が窺える。

図 3 働くことについて意識した時期と入学目的のクロス (累積)



(2) キャリア支援課や就職支援課などの学内就職支援機関の利用回数

問 20 では、キャリア支援課や就職支援課などの学内就職支援機関の利用回数をみたものであるが、「利用していない」が最も多く、次に「1～5回」と続いている。11回以上利用する学生は全体の約 10%程度である。利用していない学生が多いが、これは表 1 にみるように、約半数が学内就職支援機関を利用しないで就活をしており、残りが「まだ決まっていない」と進学を考える学生達である。利用していない学生で「まだ決まっていない」の割合が多いことから、就活に対する意識の問題であるのかも知れない。この層をいかに積極的にするかが大きな課題である。

図 4 学内就職支援機関の利用回数

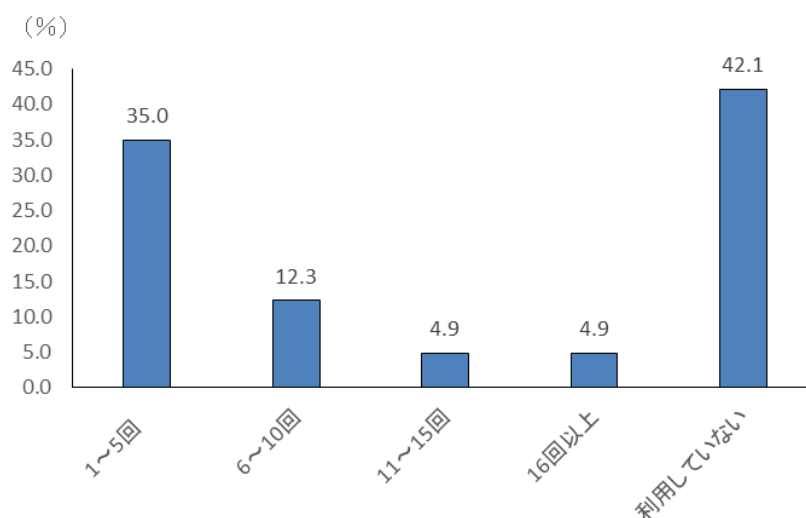
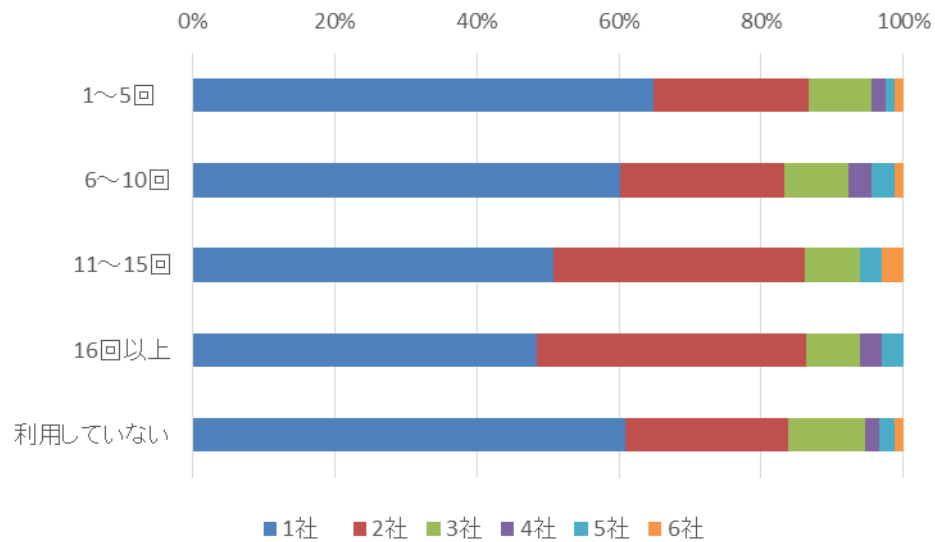


表 1 学内就職支援機関の利用回数と卒業後の進路 (問 7)

	就職(公務員・教員含む)	進学	留学	公務員・教員試験対策	就活を続ける	まだ決まっていない	無回答	総計
1～5回	69.5	7.0	1.0	6.8	3.6	11.0	1.1	100.0
6～10回	78.8	1.4	0.5	6.0	3.7	8.8	0.9	100.0
11～15回	80.2	2.3	0.0	1.2	7.0	9.3	0.0	100.0
16回以上	83.7	0.0	3.5	3.5	3.5	5.8	0.0	100.0
利用していない	49.9	16.8	3.0	8.7	3.0	17.4	1.2	100.0
無回答	50.0	14.3	0.0	14.3	0.0	7.1	14.3	100.0
総計	63.5	9.9	1.8	7.1	3.5	13.0	1.1	100.0

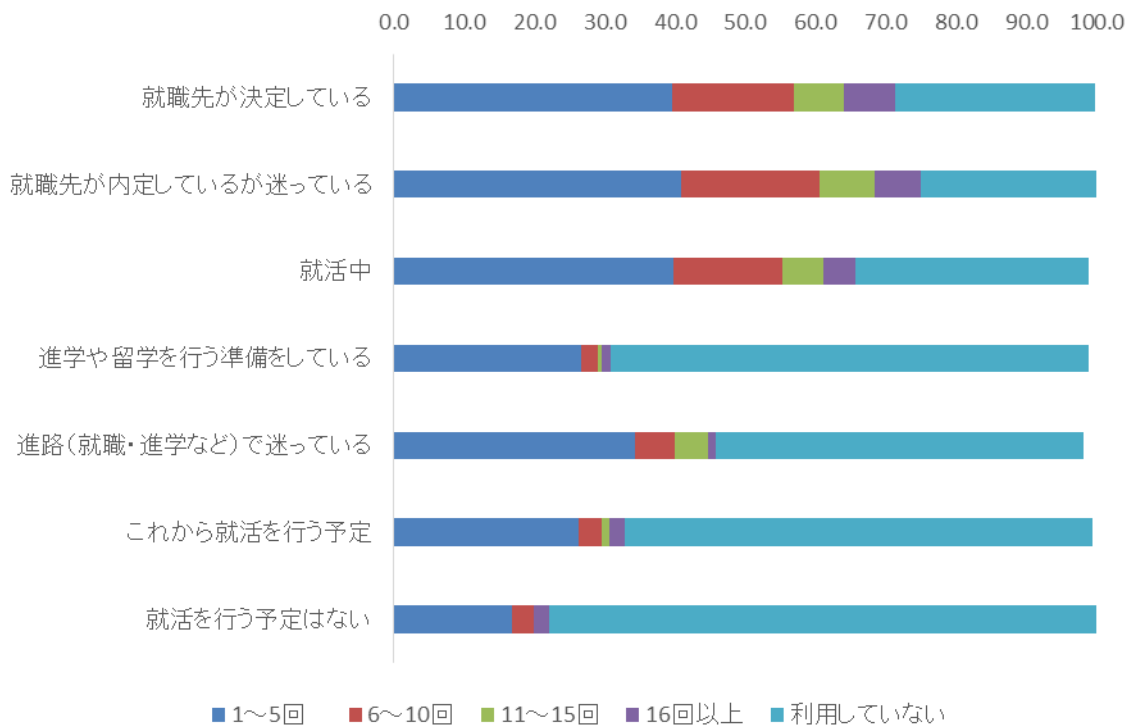
また、質問 28 で内定数を聞いているので、内定数とクロスすると、概ね利用回数が増えると内定獲得数も増えることが窺える。ただし、利用していない学生と 1～5回までの利用回数の学生の間には大きな差はないことから、もっと多く利用することにより、その効果が出てくるのではないであろうか。あるいは意識の高い学生ほど利用する回数が増え、その結果、内定数も増えるのかもしれない。

図 5 学内就職支援機関の利用回数と内定数



さらに、問 27 とのクロスを見てみた。問 27 では、現在の状況について聞いている。その結果が図 6 である。就職先が決定している学生は利用頻度が高く、就職先内定しているが迷っている学生も利用頻度は高い傾向がある。就職支援機関の相談機能が発揮されているものと思われる。ただし、就活中の学生の利用しない割合が前者に比べて高いのが気になるところではある。

図 6 学内就職支援機関の利用回数（問 20）と現在の状況（問 27）のクロス

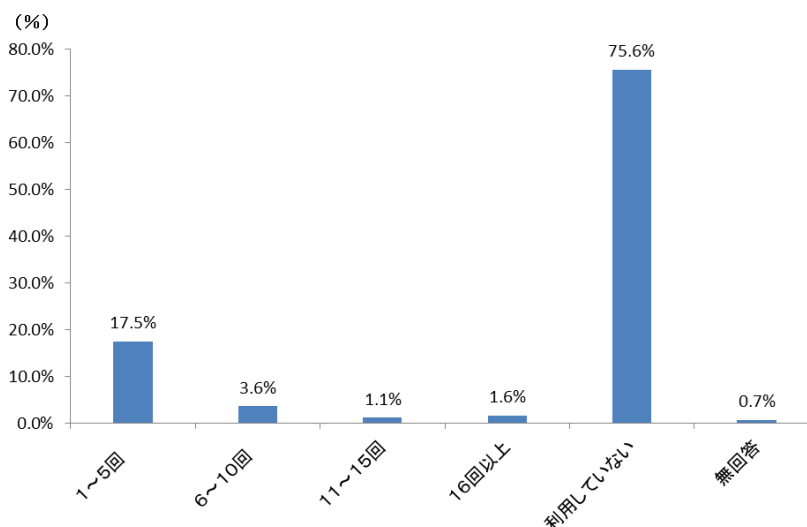


(2) 沖縄県キャリアセンターやハローワークなど学外就職支援機関の利用回数（問 22）

問 22 は学外の就職支援機関の利用状況を見たものである。それによると、利用していない学生が圧倒的に多

いことが分かる。学内就職支援機関に比べて、あまり知られていないことや大学や居住地からの交通アクセスの問題があると思われる。

図 7 沖縄県キャリアセンターやハローワークなど学外就職支援機関の利用回数（問 22）



もう一つ興味深い結果がある。それは、内定数とクロスした場合（表 2）、学外の就職支援機関を利用した学生の方が内定獲得率が高くなることである。ここで利用した学生というのは、回数に関係なく利用したかどうかで分類したものである。内定数が 1 社～2 社までは利用していない学生とあまり変わらないが、3 社以上内定を獲得した学生は利用していることが分かる。ただしこの結果からは因果関係は分からない。つまり、学外の就職支援機関を利用したから内定数が多くなったのか意識の高い学生が利用するので内定数が多いのか。恐らくは後者の方で、意識高い学生は、学外の就職支援機関もよく利用しているということであろう。

表 2 学外の就職支援機関の利用頻度（問 22）と内定数（問 28）のクロス 単位 (%)

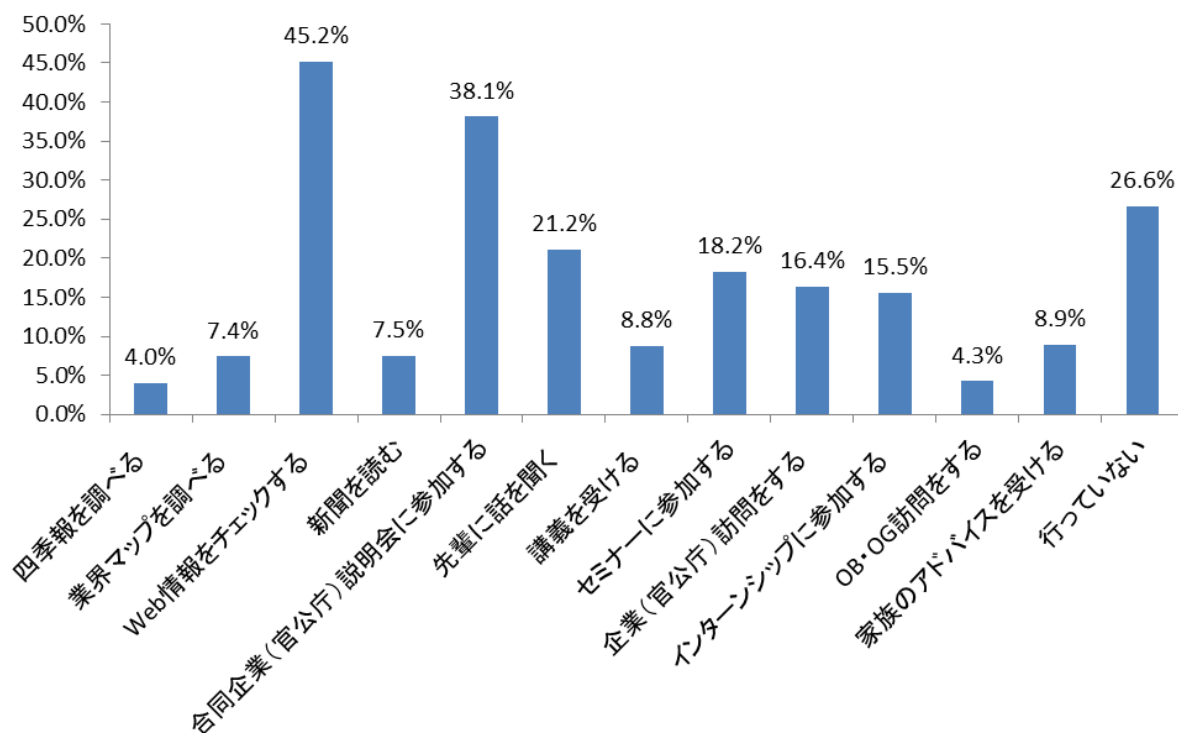
	1 社	2 社	3 社	4 社	5 社	6 社	総計
利用した学生	55.4	24.8	11.9	3.0	2.3	2.6	100.0
利用していない学生	63.3	24.6	7.7	1.7	2.1	0.5	100.0

(2) 学生はどのようにして企業を選んでいるのか

ア. 業界・企業研究の方法（問 14）

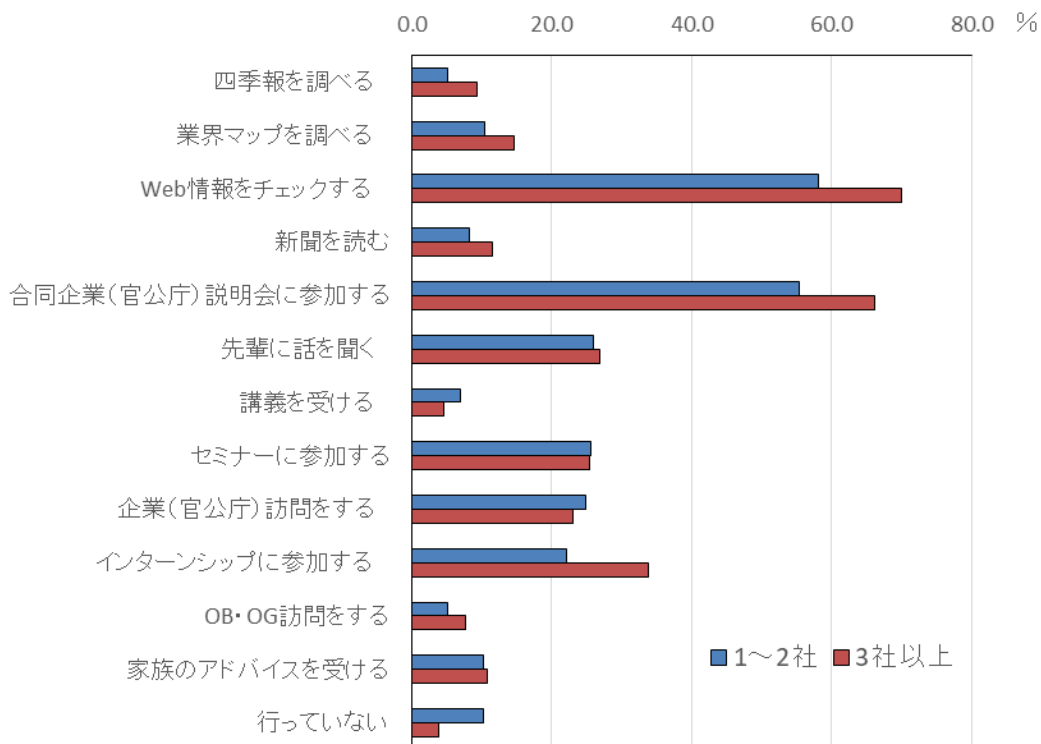
問 14 では、業界・企業研究の方法について聞いている。それによると、最も多いのが「Web 情報をチェックする」であり、次に、「合同企業説明会に参加する」、「先輩に話を聞く」、「セミナーに参加する」の順となっている。スマホの普及によって Web 情報の割合が高くなっているのであろう。また、新聞を読むや業界マップを調べるといった紙ベースの情報への割合が少ないことも今の学生の特徴である。

図 8 業界・企業（官公庁）研究の方法（問 14 複数回答）



これを、内定数とのクロスで見たのが図 9 である。ここでは分かりやすくするために内定数を 1~2 社と 3 社以上に分けてみた。それによると、最も多いのが「Web 情報をチェックする」であるなど全体の傾向は内定数による差はあまりないが、より多くの内定を獲得した学生の方がそうでない学生に比べ多くの手段で就活に役立つ情報を得ており、積極的であることが分かる。

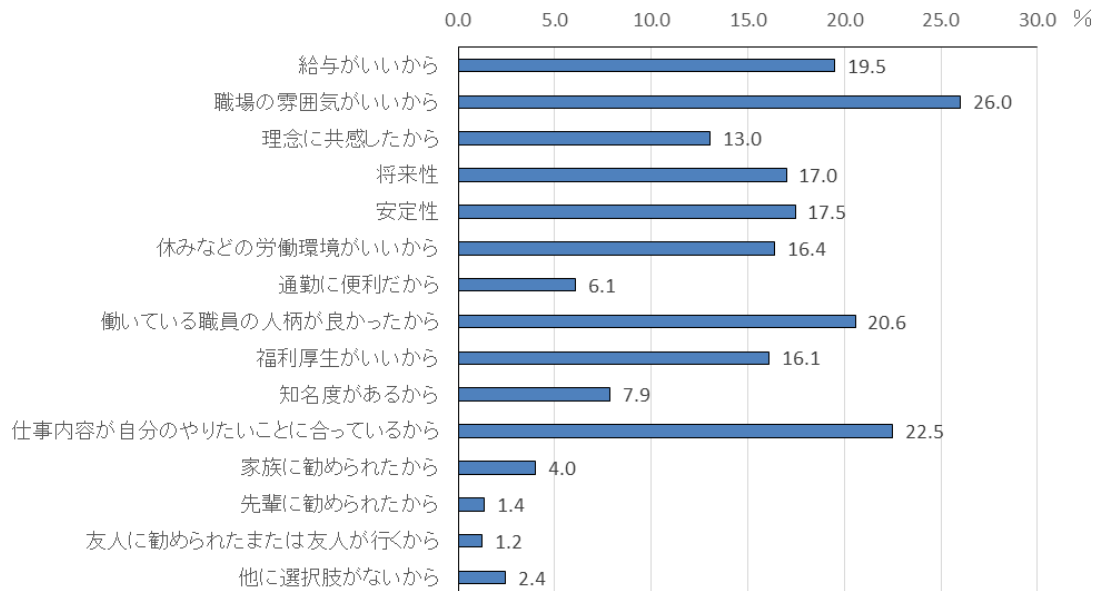
図 9 業界・企業（官公庁）研究の方法（問 14 複数回答）と内定数（問 28）



イ.就職先に決めた理由

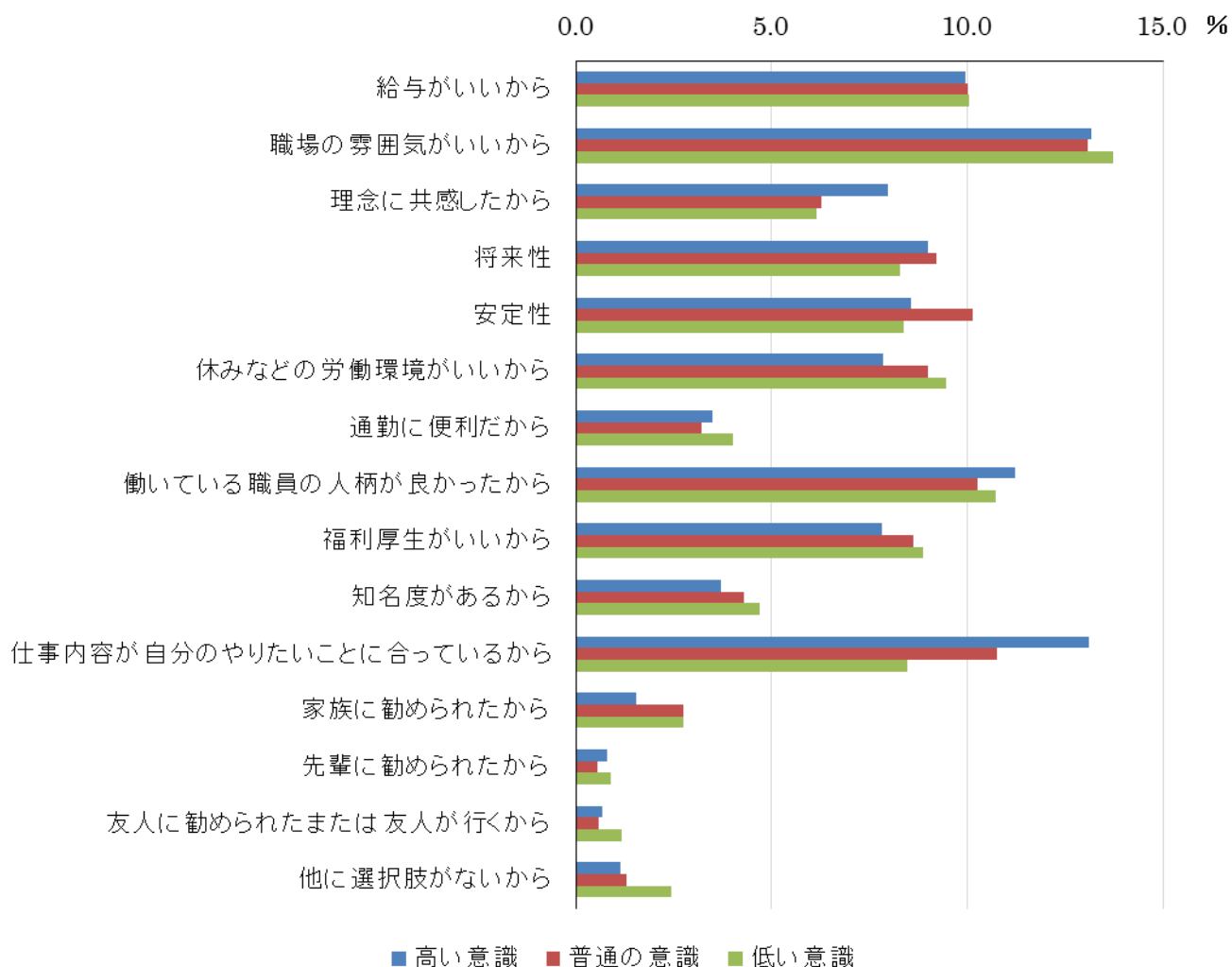
問 29 は就職先に決めた理由を聞いたものである。「職場の雰囲気がいいから」が最も多く、次いで「仕事内容が自分のやりたいことに合っているから」、「働いている職員の人柄がよかったから」と続いている。学生達は、給与や休みなどの労働環境よりも人間関係といった職場環境や仕事のやりがいを重視して就職先を選んでいることが分かる。

図 10 就職先に決めた理由（問 29 複数回答）



これを、入学目的について聞いた質問で学生の意識別にクロスしてみたのが、図 11 である。学生の意識のグループ化は働くことについて意識した時期で行った方法と同じである。それによると、意識高いグループは、「仕事内容が自分のやりたいことに合っているから」と「理念に共感したから」が他のグループに比べ高くなっている。一方、意識低いグループは、「休みなどの労働環境がいいから」、「福利厚生がいいから」、「知名度が高いから」など外形的に分かりやすい項目で選んでいる。仕事内容や会社の理念は、会社訪問したり合同企業説明会に何回も参加したり、相当研究しないと分からないのでかなり努力しながら業界・企業研究をしているのであろう。また、ここでは、示さなかったが企業訪問の回数を聞いた質問（問 16）とのクロスで見たところ、訪問回数の多い学生は「働いている職員の人柄がよかったから」や「休みなどの労働環境がいいから」を選ぶ割合が高く、何度も訪問することによって会社の実態を研究していることが窺えた。「休みなどの労働環境がいいから」は意識の低いグループと同じ項目であるが、実際に行った学生と行かないで決める学生では、研究の質が違ふと思われる。

図 11 就職先に決めた理由（問 29 複数回答）と入学の目的意識（問 1 複数回答）のクロス



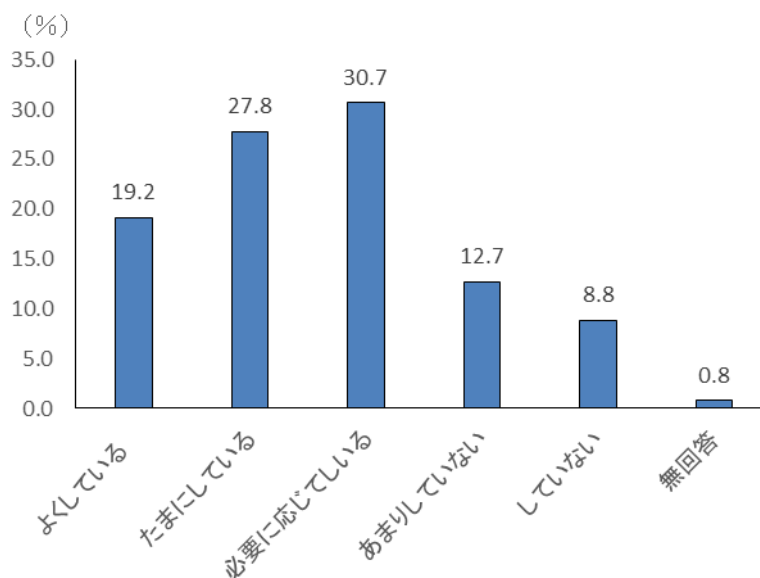
(3) 学生の家庭内のコミュニケーションの状況や進路決定の相談相手

ここでは、学生が家庭において学校や進路についてコミュニケーションを図っているかや進路を決定するに際し誰に相談しているのかについて、その傾向を見たものである。

ア.家庭で学校や進路についてどの程度話し合っているのか

問 8 は家庭で、学校の悩み事、進路の相談などをどの程度話し合っているかを聞いたものである。最も多いのが、「必要に応じてやっている」で、次いで「たまにしている」、「よくしている」と続いている。ただし、「していない」が約 9%と少なからずいることが気になるところである。

図 12 家庭で学校の悩み事、進路の相談などを話し合っているか (問 8)



これをもう少し深堀するために、問 2 の講義やゼミナールへの取り組み状況について聞いた質問とクロスしてみた。取り組みが積極的な学生は家庭でのコミュニケーションはどのようなものであろうか。その結果が次図で示されたものである。これによると、大学において講義やゼミなどに積極的に取り組んでいる学生は、そうでない学生に比べて家庭内でのコミュニケーションは活発であることが分かる。

さらに、参考までに学校の成績とクロスしてみた。学校の成績は GPA として評価され、学業成績が良いほど GPA は高くなる。クロス集計結果をみると、家庭でコミュニケーションを良くしている学生の GPA は高く、GPA の低い学生は「あまりしていない」や「していない」の割合が高くなっている傾向が見られた。家庭でコミュニケーションをよくしているから成績がいい訳ではないが、家庭でのコミュニケーションは重要であることを示唆していると言えよう。

図 13 家庭で学校の悩み事、進路の相談などを話し合っているか (問 8) と講義やゼミへの取り組み (問 2)

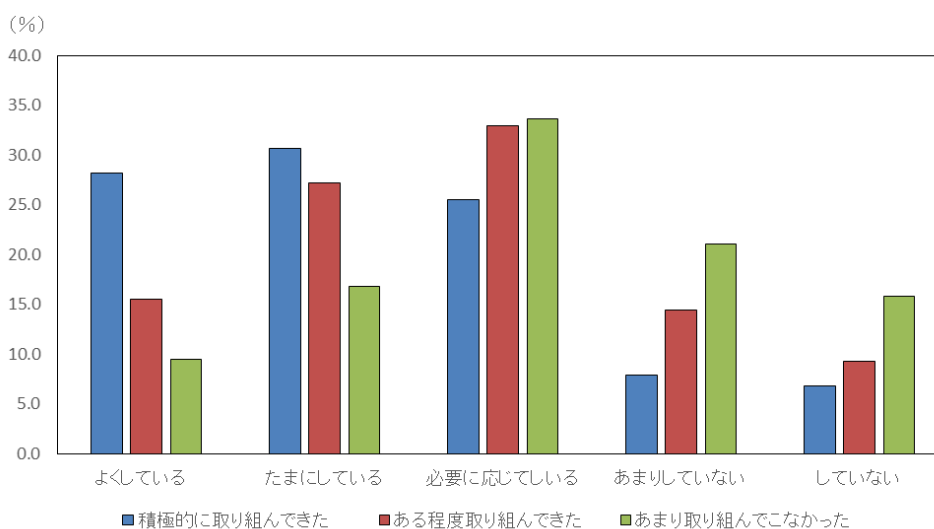
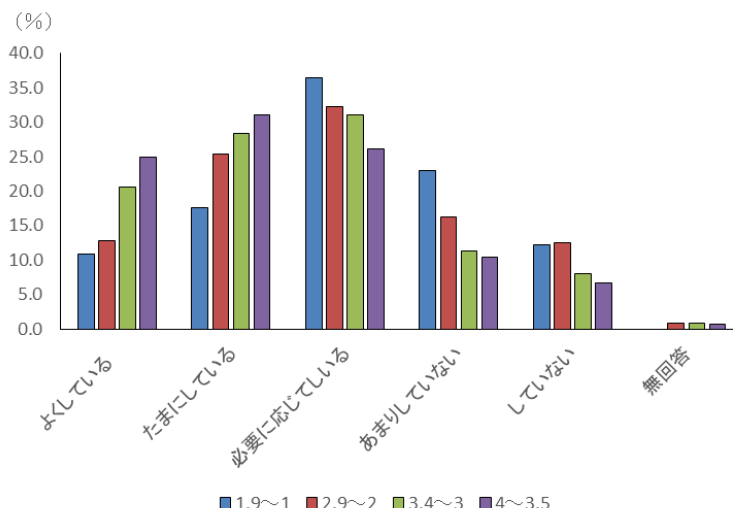


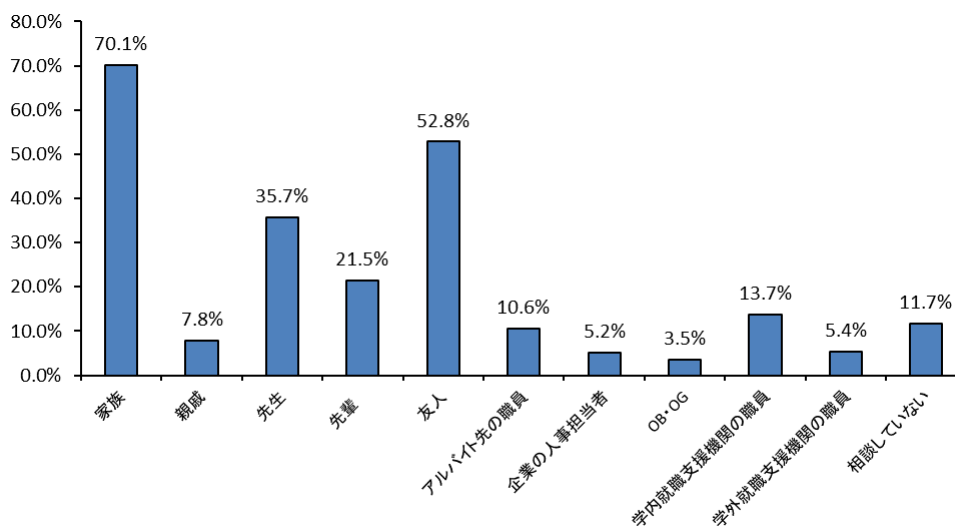
図 14 (参考) 家庭で学校の悩み事、進路の相談などを話し合っているか (問 8) と GPA



イ.進路決定の相談相手

問 25 では進路を決定する際に相談した人について聞いている。「家族」と答えたのが最も多く、次いで「友人」である。この2つが突出しており、第3位の「先生」とは大きな差がある。やはり身近で気のおけない人と相談する傾向がある。また、「学内外の就職支援機関の職員」は、いずれも少ない割合となっている。

図 15 進路相談相手 (問 25 複数回答)



これを、問 27 の現在の状況とクロスしたのが表 3 である。それによると、いずれも、「家族」と「友人」の割合は高いが、就職先は内定しているが迷っている学生は、「先生」と「学内就職支援機関の職員」の割合が多く、いろいろな人に相談していることが分かる。これから就活を行う予定と答えた学生は、「相談していない」の割合が高く、周りに相談できる人が多いことが就職活動においても重要であることを示唆している。

表 3 進路相談相手（問 25 複数回答）と現在の状況（問 27）

単位：％

	就職先が決定している	就職先が内定しているが迷っている	就活中	進学や留学を行う準備をしている	進路(就職・進学など)で迷っている	これから就活を行う予定	就活を行う予定はない	総計
家族	71.9	73.7	71.8	76.9	73.3	64.0	59.5	70.1
親戚	8.2	5.3	9.9	4.1	11.4	5.4	7.6	7.8
先生	31.5	40.8	41.6	49.1	41.9	34.9	31.3	35.7
先輩	22.0	18.4	20.2	24.9	24.8	16.7	23.7	21.5
友人	52.2	53.9	61.5	55.6	54.3	51.1	43.5	52.8
アルバイト先の職員	11.0	15.8	8.8	6.5	15.2	8.6	14.5	10.6
企業の人事担当者	8.8	7.9	2.3	1.2	0.0	1.6	1.5	5.2
OB・OG	3.3	2.6	4.6	2.4	5.7	3.2	3.8	3.5
学内就職支援機関の職員	18.4	21.1	16.0	3.0	10.5	6.5	5.3	13.7
学外就職支援機関の職員	7.9	9.2	6.1	0.6	1.0	2.2	1.5	5.4
相談していない	8.8	6.6	9.2	14.8	11.4	16.7	27.5	11.7

(4) まとめとして

このように、就活において重要な質問項目について集計結果を見てきたが、入学の目的意識の高い学生が講義やゼミへの取り組みに積極的であり、就活活動では働くことに対する意識も早めであり、就職先を検討する際においても、しっかりと業界・企業研究を行っていることが分かった。また、学内外の就職支援機関の利用においても意識の高い学生が利用頻度も高くなる傾向が窺えた。さらに、就活においては家庭や大学において相談相手が多い程、就活がうまくいく傾向もあり、相談の経路をいかに多く持たせるかが重要である。一方、就職支援機関を利用しない学生は進路未決定率が高いことも分かった。

学生の意識を高めるためのキャリア教育が重要であり、学内外の就職支援機関をいかに利用させるための全体的な取り組みが重要である。大学や学外就職支援機関だけでなく、家庭の役割も大きいことがアンケートから見てきたことでもある。大学—学外就職支援機関—家庭の連携が重要であることを改めて今回のアンケートから示唆された。

今回のアンケートが大学関係者を含め 1 人でも多くの学生が就職できるための取り組みの参考になれば幸いである。